

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学部 言語学専修 3年 林 紀言

今回の派遣を通して、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の見学および現地の学生たちと様々なテーマについて意見交換をした。例えば、シリアの難民問題のみならず、フランスの進学指導や、日本とフランスの男女平等、近代日本における女性運動など、かなり幅広いテーマをめぐって交流を深めた。

プログラムの初日には、ハイデルベルク大学を訪問し、それから当大学の日本学研究科を見学した。その図書室の蔵書量は図書館並みと言っても過言ではないと思う。日本史や日本社会、日本芸術史、日本経済などの日本語の書籍や学術誌のほか、英語で書かれた日本に関する書籍もある。見学の時に、ちょうど当研究科の30周年の展示会が行われていた。図書室を見学してから、その展示会を見て、ハイデルベルク大学は30年間の努力でいろいろな日本の研究資料や参考書など集めて現在の図書室が築かれたことがわかり、非常に感心した。

このプログラムでは、他大学とのワークショップや他大学の見学などもできたが、このレポートでは、主にストラスブールにある国立大学図書館の見学を書こうと思っている。この図書館はフランスでは二番目に古い図書館である。さらに、この図書館は当地にあったフランスとプロイセンの戦争の後でドイツ帝国によって作られたため、図書館の建築様式はドイツ風とフランス風が組み合わせたものである。しかし、見学の担当によると、今年はその図書館のリニューアルしてからの四年目であるらしい。よって、歴史は二番目に古い図書館と言っても、図書館の設備が実際はかなり新しくできたとも言える。特に、図書館の外見のみならず、館内のインテリアもできるだけリニューアルの前の様子を残して、それを電子検索システムや書庫にある火災予防システムなどといった現代的な技術に合わせるようにアレンジしていることがかなり特別なところである。それを見ると、ちょっと自分がタイムトラベルで17世紀のストラスブールに行った感じがした。その図書館をもうちょっと回ってみると、そこには法律や社会、地理、哲学、神学などといった幅広い分野の本が所蔵されていることがわかり、この図書館がどれほど研究に役に立つところであるか、実感した。

今回のプログラムに参加したおかげで、ハイデルベルクやストラスブールの大学生との交流ができた。しかし、もっとも予想していなかったことも今回のプログラムによってできた。それは両大学の研究者と自分の研究テーマについてたくさんの相談ができたことである。彼らと色々議論しながら自分の興味があるテーマもどんどん増えてきて、それから彼らの経験を聞きながら自分の将来のために色々考えた。さらに、ハイデルベルクとストラスブールの学習環境の見学を通して、大学院進学の情報収集がうまくできたと思う。もしこのようなプログラムが長く続けられると、他大学との関係が強化できると考えられる。そのみならず、進学するつもりの方の学生のための情報収集も簡単にできると考えられる。